

HOWS 連続講座「大西巨人『神聖喜劇』を読む」

ニュース 1号 2019年1月16日

「大西巨人『神聖喜劇』を読む」ニュース編集班

HOWS (本郷文化フォーラムワーカーズスクール)

2018年12月5日、連続講座始まる

HOWS 連続講座「大西巨人『神聖喜劇』を読む」が2018年12月5日に始まりました。『神聖喜劇』は、マルクス主義の作家大西巨人が四半世紀を費やして完成させた大長編小説です。アジア太平洋戦争下の対馬兵営において主人公東堂太郎が、自身の教養形成の過程を振り返りながら、回生を模索し、有志との連帯を実現させていく物語は、グローバリズムによって労働者の尊厳が損なわれ、不平等が拡大していく現在を生きる私たちに勇気を与えます。「戦後文学の金字塔」などと称され、名作の評価はすでに定着していますが、読む者を実践的な活動へと促す『神聖喜劇』の魅力の解明は、十分に尽くされてはいないでしょう。本講座では、長編を章ごとに読み進め、報告者の問題提起を踏まえた討論を通じて、主体的な理解を深め、共有することを目指すものです。

平日の夜にもかかわらず、第1回目には20数名の参加者がありました。『神聖喜劇』を初めて読む人、途中で挫折したままになっていた人、久しぶりに再読しようとする人など、さまざまですが、『神聖喜劇』に深く分け入り、思考を鍛えたいという意欲は共通しているように感じられました。1年間の展開が楽しみです。

会場のホールの書棚には、大西巨人コーナーが設けられていました。物販用の新刊書に加えて、主要な著作を展示したもので、講座に花を添えていました。会場では、『歴史の総合者として——大西巨人未刊行批評集成』（幻戯書房）を始めとする大西巨人の著作、湯地朝雄さんの『政治的芸術』・立野正裕さんの『精神のたたかい』・二松学舎大学近代文学ゼミナール論集『解纜』（『神聖喜劇』特集）などの関連書籍を販売しています。コーナーは、少しずつ充実させていく予定です。活用していただければ幸いです。

『神聖喜劇』を論ずる場を引き継ぎ、発展させていくこと

HOWSで『神聖喜劇』を取り上げるのは2回目になります。前回のHOWS講座「大西巨人『神聖喜劇』を読む」が行われたのは、2001年6月1日（日）～2004年3月20日（日）のことで全10回でした。武井昭夫、湯地朝雄、立野正裕、桂秀実、鎌田哲哉、荒井晴彦、高和政のみなさんに各回の話題提供をお願いし、また最終回には大西巨人さんを招き、座談の時を持ちました。

さらにさかのぼれば、HOWSが始まる前にも、本郷文化フォーラム連続講座「大西巨人——その文学と思想」（1997年4月25日〔金〕～8月22日〔金〕、全5回）が開かれています。

『神聖喜劇』の一部が『社会評論』誌に発表されたことが示すように、『思想運動』および『社会評論』は、大西巨人にとって主要な発表媒体の一つでした。また、両紙誌には、大西巨人をめぐる論説が数多く掲載されています。思想運動およびHOWSは、大西巨人と共に考える現場であり続けてきたわけであり、事情は今も変わりません。私たちには、『神聖喜劇』をめぐる議論の豊かな蓄積があり、それらを有効に活用しながら、作品に対する認識をさらに高めていくことが期待されています。アドバイザーの山口が前回の講座のニュースを資料として配付したのは、過去を参照する糸口とするためでした。『神

『神聖喜劇』を論じてきた歴史を引き継ぎ、新しい読者を生み出すために、場を発展させていくことが課題になります。

東堂太郎の「何物かへの恐れ」をめぐって——伊藤龍哉さんの報告

第1回目「第一部 絶海の章」(第一巻)——東堂太郎の虚無主義」の報告者は、HOWS 受講生の伊藤龍哉さんが務めました。報告に先立って、伊藤さんは、話し合いが弁証法的に展開していくことを期待すると述べ、東堂の自己語りを作品の多様な形式が相対化するのに見合うように、参加者の思いが個的であることを越えていくことを目指して、そのための話題が提供できれば、と思いを語りました。

「東堂太郎の虚無主義と「何物かへの恐れ」と題した報告では、主人公の特異な虚無主義の内実が丹念に検証されていきました。自棄的な心情に陥った時、言動は他人を顧みなくなることが普通です。ところが東堂の場合は、社会的な意識が手放されておらず、思考が論理的に展開されているところに特徴があります。「克己主義(ストイシズム)」と名付けられた性向は、荒んだ日々を過ごす中でも失われずに保持され、自己の内に自身ならざるもの呼び込み、不正を目の当たりにした時に声を上げることを促していきます。『神聖喜劇』において、虚無主義からたたかいていくことが必然的であること、活動と並行して東堂において「何物かへの恐れ」の復興が追究されていることを、伊藤さんは指摘しました。東堂太郎が触知し、しかし、明確に言語化できていない、宗教的な精神の今日的な樹立をめぐる模索(『地獄変相奏鳴曲』以降に明確に取り上げられていくテーマ)に迫ろうとする、伊藤さんの意欲的な姿勢が印象に残る報告でした。よりどころを喪った近代人の苦悩やなお普遍的な価値を求めようとする志向が世界的同時性を帯びた課題であることを示すために、有島武郎『或る女』、コンラッド『闇の奥』、シーモノフ『ロシヤの人々』など、『神聖喜劇』に直接引かれていない作品とも積極的に関連づけようとする手続きにも興味深いものがありました。

討論では、報告における虚無主義のとらえ方について質問があったほか、武士道など前近代的な思想の受容、民族と人民とを重ねて発想している姿勢、同時代の共産党の動向からの影響などをめぐって意見が出されました。伊藤さんの問題提起に触発され、それぞれが抱いていた疑問が率直に表明された印象です。活発なやり取りは、予定された時間まで途切れることはありませんでした。なお、杉山雄大さんから印象記を寄せていただいていますので、あわせてお読みください。

講座の後に開かれた懇親会では、参加者の自己紹介と講座への期待が語られました。立野正裕さんの「『神聖喜劇』が翻訳されていれば、間違いなく世界文学の傑作として評価されることになるだろう」という発言には参加者全員が共感していました。本講座が『神聖喜劇』を「世界文学」たらしめる運動の一つとなればと思います。

ニュースについてのお願ひ

連続講座のニュースを発行することにしました。講座を記録すること、議論の材料を提供すること、情報交換の場となることなどを目指しています。

とりあえず船出は果たしましたが、体裁、内容ともに至らないところが多いでしょう。ニュースに対する率直なご意見、ご要望をお聞かせいただければ幸いです。また、投稿を歓迎します。講座に広く関連することで発言したいことがありましたら、お寄せください。

みなさんのご協力によって充実した紙面を作っていければと考えております。どうぞよろしくお願ひ

いたします。

「大西巨人『神聖喜劇』を読む」 講座第一回目を終えて 伊藤龍哉

博多港を出港し対馬^{いづはら}厳原へと揺られる船中、東堂太郎は、「悔恨ともあこがれともつかぬ一つのするどい疼きを伴った感情」に襲われる。それはあたかも防人の歌によって引き起こされた。その歌は「百隈の道は来にしをまた更に八十島過ぎて別れか行かむ」であった。故郷との別離を詠んだ歌である。ここに歌われた「故郷」は、東堂にとって、たんに地理的なものであっただろうか。そうではあるまい。ここでいう「故郷」は、プラトンのいう「よりよき故郷にたいする魂の郷愁」であろう。

当時の東堂は奇怪な想念をかれの胸奥に棲息させていた。それは、人生において自分が何事かを為す人間ならば、いかに戦火の洗礼を浴びようとも私は必ず死なないであろう、というものであった。「生」にたいする「傲慢な思い上がり」であったかともかれは自身を顧みる。わたしは思う。この「生」にたいする「傲慢な思い上がり」は、「生」への根源的な謙虚さの感覚と矛盾しないと。つまり「よりよき故郷にたいする魂の郷愁」が、その理想の高さが、いかに戦火の洗礼を浴びようとも私は必ず死なないであろう、という思念を生み出すのであり、さらには「何物かへの恐れ」を抱かせるにいたる。

たしかに東堂は時代の敗北とともに敗北した。しかしいわゆる虚無主義者のようにはならなかった。かれは戦争の渦中に悲劇的破局しか予想し得ないこの国を凝視しぬくことで敗北を選択することができたのであり、それは我流虚無主義を育て上げ、独自のニヒリズムの倫理と論理の一貫性を守りとおしたことを意味する。一貫しているということが、やがて軍隊内での闘争を可能にする。

「第一部 絶海の章」のハイライトは「忘れまして・知りません」問答であろう。軍隊では「忘れまして」のみが存在することを許される。「知りません」は存在し得ない。しかしここに「忘れまして」を敢然と拒否する二人の青年を、読者は目撃することになる。ひとは東堂。いまひとは冬木照美である。

当日の参加者の発言に、東堂と冬木が「忘れまして」を拒否したことを、それぞれの位相において考えるべきではないか、というものがあつた。これはわたしに事態を新しくみせた。わたしは冬木における「忘れまして」拒否の事訳を深く考えていなかった。

当初冬木は「忘れまして」を言明していた。おそらく、冬木はなんら痛痒をも感じず「忘れまして」を言ったはずだ。しかし東堂が「忘れまして」拒否を頑張りとおすのを見て、はっとしたのではないか。それはさながら、「私はあの方を知りません」と三度いった後、雄鶏の鳴き声を聞き、はっとしたペテロのようである。冬木は軍曹のまえに歩み出る。そして底力のある声で、「冬木二等兵は、まちがえて、嘘を言いました。」と「忘れまして」を撤回するのである。冬木におけるペテロ的体験、そこにもまた「何物かへの恐れ」の感覚があることをいま予感している。参加者の発言が閃光となり、わたしに冬木照美の深淵を一瞬間照らしたのである。

正しさの根拠を問う思考と実践

——第一回 大西巨人『神聖喜劇』を読む・印象記

杉山雄大

第一回目の本講座では、伊藤龍哉氏が「東堂太郎の虚無主義と「何物かへの恐れ」と題する報告を行った。冒頭でアドバイザーの山口直孝氏によって、過去に HOWS で行われた『神聖喜劇』講座のチラシやニュースが配布された。初めて HOWS の『神聖喜劇』講座に参加する者にとっては、どれもが貴

重なる資料である。報告では、東堂太郎の「我流虚無主義」と「宗教的な心構え」の持つ積極的な意義が、『精神の氷点』の水村宏紀の虚無主義や、有島武郎『或る女』、コンラッド『闇の奥』などとの比較を通じて示された。虚無主義と「宗教的な心構え」をめぐる問題は、大西巨人文芸における謎のひとつであり、先行研究においてもまだ十分に論じられているとはいえない。本講座を通じて、この難問の解明のために前進できれば良いと思う。討論で、32年テーゼと東堂の思想との関係性が議論されたが、この問題は東堂のマルクス主義と虚無主義、また「宗教的感情」との関係の問題にも繋げることができそうである。「世界をさまざまに解釈してきた」従来の哲学を退け、「世界を変革すること」(マルクス「フョイエルバッハに関するテーゼ」)に注力するマルクス主義と、世界を何らかの真理に基づいて把握することの不可能に直面する虚無主義は、超越的なものの否定など、近似する部分を持ちながらも、根本的には異なる思想である。東堂の内部において、両者はどのように重なり、また対立しているのだろうか。さらに、東堂はマルクス主義とも虚無主義とも本来対立すべき「宗教的感情」を尊重している人物でもある。虚無主義的な動機に基づく倫理の破壊を阻止するためには、普遍的な正しさと、それを信じる「宗教的感情」が意義を持つとも言える。しかし、マルクス主義的に考えるならば、宗教的なものは弁証法的唯物論によって歴史的に解消されるべきものでもある。だが、東堂の定義する「宗教的感情」に該当するものとして、マルクスの「ヘーゲル法哲学批判序説」の印象的な結句が引用されていることを考えると、改めて東堂の述べる「宗教的感情」の内実が一筋縄ではいかないことを思い知らされる。東堂のマルクス主義と虚無主義と「宗教的感情」との関係は非常に多面的であり、深淵であると言うほかない。討論で指摘された東堂の美学的側面と武士道などの封建的倫理との関係の問題も、この東堂の複雑な内面に淵源するのではないだろうか。また、これらの思考は、登場人物同士の多面的な関係を通じて形象化されている。「天皇陛下への人なみな忠義は尽くされるつもりですよ」と述べながらも、清潔な倫理観を備える冬木照美と東堂との関係は、「宗教的感情」の可能性とその限界や、ナショナリズムの問題を考えるうえで興味深い。討論で、東堂の民族意識を巨人が弱点と認めていたことが紹介されたが、軍隊での東堂が単純な理想人間像としてではなく、あえて弱点を抱えた人物として描かれている点は、今後さらに注目されてよいだろう。軍隊での東堂と戦後における東堂の語り混在する形式の意義など、東堂の思考の到達点には還元されない『神聖喜劇』全体の政治的・芸術的価値を検討していくきっかけとなるはずである。